山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第47号（2019. 3）

アメリカ映画が映し出すアメリカ黒人

日本人視聴者として黒人ステレオタイプをどう受け取るか

藤本　幸伸

African Americans being represented in the American movies

FUJIMOTO Yukinobu
（Received December 21, 2018）

キーワード：アメリカ映画、アメリカ黒人、ステレオタイプ

はじめに

過去数年間、「英語文学講義」（2017年までの「英米文学講義」）の授業の中で、学生にアメリカ黒人についてのイメージを質問してきた。その学生たちの反応を項目別に挙げ、今の学生のアメリカ黒人イメージを確認しておきたい。居住地域では、南部、南部農村、西部の都市部、地域を限定せず工場地区と応えるものが多い。生活形態では、農業、自給自足、集団（たむろして）生活、貧困生活、差別を受けているという反応が返ってくる。また、職業では、工場労働者、肉体労働者、非正規労働者、清掃員、レストランのウエイター、ヒップホップなどの歌手、陸上、バスケット、ゴルフなどのスポーツ選手、軍人をあげる。

ところが、実際にアメリカ黒人が居住する地域は、圧倒的に南部が多く、しかも都市部に集中している。次に多い居住地域はニューヨーク市など北東部や中西部の大都市であり、西部に居住するアメリカ黒人はわずかである。また、生活形態でも、1980年代以降に増えたアメリカ黒人中流階級は、白人同様に成功者として都市郊外に居住する傾向が強く、逆に貧困黒人層は都市部に集中する。学生があげる黒人の職業に、弁護士、研究者、教師、政治家などが欠落していることから、学生の意識の中では、アメリカ黒人と知識人との結びつきは弱いと推測できる。

このように、学生のアメリカ黒人の知識には大きな偏りが見られる。たしかにキング牧師や黒人初の大リーガーが教材化されていたとは言え、日本の義務教育や高等学校教育でアメリカ黒人の現状を特別に取り上げることはないであろう。だが、スポーツや音楽を通じて、アメリカ黒人に触れる機会はあったはずである。大学入学後も、バスケットボールなどスポーツやジャズ音楽などを通じて日常的にアメリカ黒人の情報に接する機会は少なくないはずだ。もし日常的にある程度アメリカ黒人の情報に接していながらずアメリカ黒人の知識に偏りがあるとすれば、ほかの事柄、たとえばヨーロッパで起きている移民問題やAI脅威論などに関しても知識が偏る傾向があると言える。多くの中学生や高校生は、英語という科目からグローバル化あるいは異文化理解を強く連想するはずである。将来、教育学部の卒業生たちが英語教師として中学校や高等学校の教壇に立つことを想定すると、アメリカ黒人文化に限らずに異文化や国際情勢についての知識を広く持っておくことは望ましいにはずで、ましてや異文化知識の偏りなどは修正しておくに越したことはないだろう。

総花的に異文化を理解することは難しいが、異文化の一分野について、インターネット上で公的資料を入手し、その資料を読み解いて知識を増やし、その知識に基づいて公正な判断をしていく態度を身につけることは可能である。「英語文学講義」ではアメリカ黒人について、まず様々な公的データを読み解いてその実像、特に公民権運動以降のアメリカ黒人の現状を想像的に再構成し、さらに言葉と数値資料だけでは想像しにくいアメリカ黒人のリアルな姿を映像表現から捉えていくことを目指している。

たしかに映像表現は聴覚と視覚を通じてリアルで圧倒的に豊富な情報を伝えるのだが、そこには映画ならではの問題点があることも学生に注意喚起しなければならない。アメリカ文化では映画は大衆文化として幅

広く人々に浸透している。2016年の*Theatrical Market Statistics*によると、年間約700本の映画が制作され、延べチケット購入数は13億1,500万人である。一週間に約2,530万ものアメリカ人が映画を見ているという計算だ。このような映画好きの観客の大半が白人中産階級であると言われている。大衆文化としての宿命として、映画は興行収入を上げるために、観客である白人中産階級の価値観に配慮しなければならない。必然、白人中産階級が好ましいと感じるアメリカ黒人が多く映画に登場することになる。

また、アメリカでは、大統領あるいはその政党が時代の価値観を代表する。共和党の大統領政権では、自由に価値を置く映画や家族を守る強い父親が登場する映画が多く制作され、民主党の大統領政権になると、平等や社会的弱者の権利回復を目指す映画が多く制作される傾向がある。よって、大統領とその政党が変われば、映画に登場する黒人イメージも変わってくる。更に、総じてリベラル派に属するハリウッド映画監督だが、白人監督の黒人観によっても黒人の役割が決まってしまうことも考慮に入れておかねばならない。映像表現に伴う独特の問題があるとは言え、時代による黒人像の偏向を理解しておくことで、時代や映画監督の価値観による黒人イメージの偏りを中和することは可能である。

この授業では、異文化の知識を活用する方法と異文化について公正な判断をすることの重要性を学生に理解させることを目指している。異文化の一例としてアメリカ黒人の現状についての知識を豊かにし、その上でアメリカ黒人の現状と課題を公正に判断できるようにしたい。授業では、まず公民権運動以降のアメリカ黒人史を資料を活用して解説したあと、大統領と政権の交代に応じて、映像表現のアメリカ黒人イメージが変化していくさまを映画の一部を紹介しながら確認している。本論文では、授業で扱っている公民権運動以降のアメリカ黒人の実態を簡単に紹介し、各時代の価値観の変化に応じてイメージが変わっていくアメリカ黒人の映像表現を紹介していくことにする。

１．公民権運動前後のアメリカ黒人

授業では、学生に「ビジュアルとデータで辿るアメリカ黒人の歴史」という資料を配布し、奴隷貿易から21世紀初めまでの黒人の歴史を概略的に解説している。特に、公民権運動以降の黒人の状況を示す資料を読み解きながら、学生たちの黒人イメージの刷新を図っている。以下、新しい資料を追加しながら、授業内容を再現しておく。

１－１　黒人の居住地域について

まず総人口に対する2000年時点の黒人比率が、南部54.8％、北東部17.6％、中西部18.8％、西部8.9％と、圧倒的に南部の居住率が高いことや、西部には総人口に対して8.9％しか黒人は居住していないことを、配布資料の図表から確認する。また、人種ごとの居住地域の変化を示した図表を参照して、過去30年間で都市部に居住する黒人の比率に大きな変化はないが、郊外に居住する黒人の比率は二倍強に増加し、逆に農村部居住の黒人の数は減少していることも確認する。アメリカで郊外に住むことができるのは中産階級であるということを示して、黒人の中産階級化が進んでいるのを理解する。さらに、同じく過去30年間で、両親が揃った家族が減少し、一人暮らしが微増し、女性世帯主の家族は二倍強に増えている。女性世帯主家族は、ヒスパニックやネイティブ・アメリカンでも増加しているが、黒人女性の単親家庭は飛び抜けて増加傾向にある。女性が世帯主の家族にはシングルマザーの貧困家庭が多いことを考えると、過去30年間で、中流階級とシングルマザー貧困層の増加という黒人社会の二極化が進んでいることが分かる。このように図表を一緒に読み解きながら、今日の黒人の状況を学生とともに理解していく。

因みに、次の表１と表２は、授業で使った2002年以降の黒人の居住地域に関するデータを示すアメリカ国勢調査局発行の*The Black Population:2010*の表である。表１から、西部に居住する黒人全体の比率9.8％は2000年の8.9％とほとんど変わらないが、異人種婚家庭の23％は全体の２倍以上で、北東部の20.6％よりも多いことが大きな特徴であると言える。表２は、黒人の居住地域を州単位まで細分化したものだが、カリフォルニア州に居住する異人種婚家庭がニューヨーク州よりも多く突出した傾向を示している。黒人の居住地域として西部をあげた学生が、カリフォルニアに居住する異人種婚家庭の黒人を想定したとすれば、最新情報を手にしていたと褒めてやりたいところだが、残念ながらそうではないだろう。やはり、客観的なデータを基にした理解を促したい。

表１　黒人が多く居住する地域

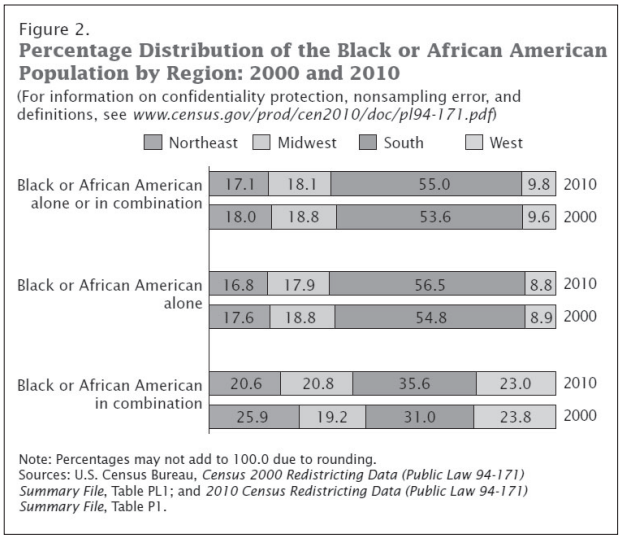
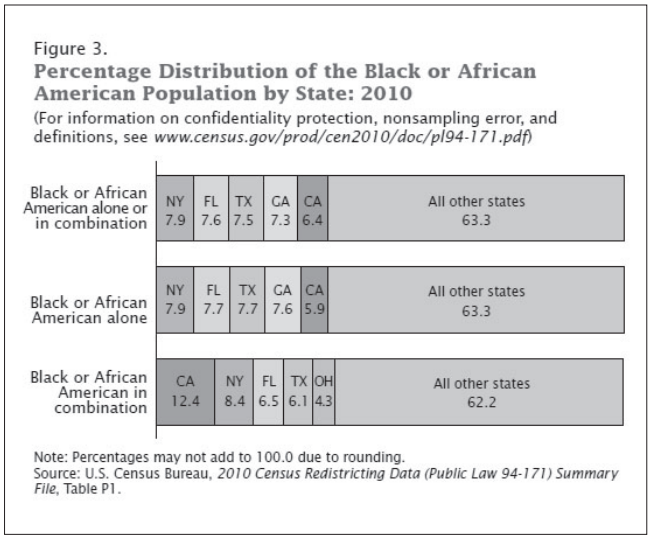


表２　黒人が多く居住する州



以上をまとめると、黒人の約半分は南部に居住ししかも黒人配偶者同士の家族である。その他は、北東部と中西部にそれぞれ約18％前後、西部に10％弱の割合で居住する。大きな特徴は、北東部と西部に居住する黒人は、異人種婚家庭が多いということだ。北東部と西部の中でも、ニューヨーク州とカリフォルニア州に異人種婚家庭の比率が高いことは注目すべきである。おそらくニューヨーク州とカリフォルニア州は、他の州に比べて自由度が大きいからだと想像される。

１－２　黒人の所得について

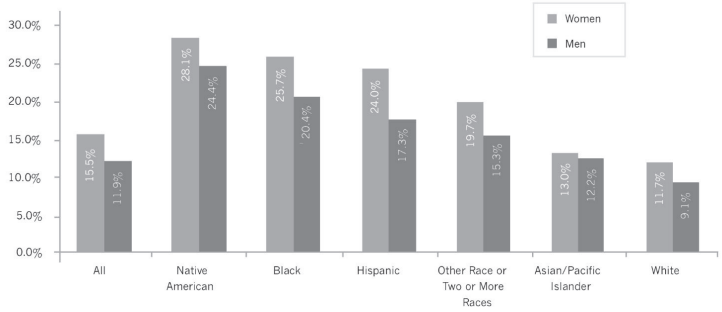
次の表は、国勢調査を基に1980年から2001年までの黒人の所得を示したものである。20年間で貧困層は30％から21％まで下がり、所得75,000から99,999ドルの中流階級の黒人が6.2％から約9％と1.5倍増え、さらに100，000以上の富裕層黒人は1980年の時点ではわずか3.4％であったのが、1999年の11.4％と約3倍に増加している。確かに貧困層は減少しているが、それ以上に中流・富裕層の増加は大きな変化である。1980年後半から90年代にかけて黒人富裕層が誕生し、黒人社会の二極化が進んでいったことがはっきりとしている。「黒人中産階級が誕生した」という言葉だけよりも、このような表を提示することで学生の理解は高まるはずである。

表３　1980～2001年までの白人と黒人の所得推移

	所得													
	under 15,000		15,000 to 24,999		25,000 to 34,999		35,000 to 49,999		50,000 to 74,999		75,000 to 99,999		100,000 and over	
	White	Black	White	Black	White	Black	White	Black	White	Black	White	Black	White	Black
1980	13.6	30.6	12.1	17.8	12.0	13.6	16.6	14.2	22.3	14.2	12.1	6.2	11.3	3.4
1985	13.5	29.7	11.9	16.5	11.5	13.3	16.2	14.3	20.8	14.7	12.4	6.8	13.6	4.6
1989	11.8	28.2	11.2	14.9	11.1	13.1	15.2	13.9	20.8	15.7	13.0	7.1	16.9	7.1
1994	12.7	27.7	12.1	16.1	11.4	12.2	15.0	13.6	19.5	15.0	12.1	7.9	17.2	7.6
1999	10.3	22.0	11.0	14.5	10.8	12.7	14.1	14.1	18.8	16.3	13.3	9.0	21.9	11.4
2000	10.8	21.0	10.8	14.4	10.3	12.9	14.4	15.4	18.6	17.2	13.2	8.8	21.9	10.3
2001	11.0	22.1	11.1	14.5	10.1	12.8	14.8	15.5	18.2	16.1	13.1	9.1	21.6	9.9

次に、貧困層と性別および学歴のデータを使って、黒人社会を別の側面から見ていく。このように資料を積み重ねていくことで、学生は黒人の状況をイメージしやすくなる。人種ごとの貧困率を性別で比較した表4から、全ての人種で女性のほうが貧困率は高く、中でもネイティブ・アメリカン、黒人とヒスパニックの女性の貧困率が、白人女性に比して突出して高いことが理解できる。

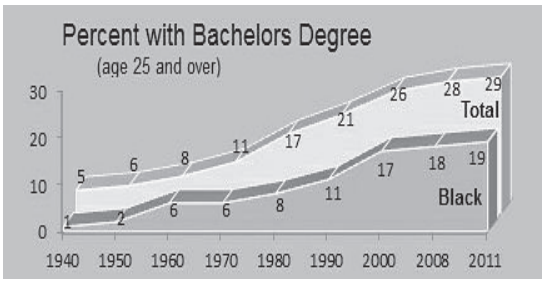
表４　人種・性別の貧困率　（出典：The Institute for Women’s Policy Research, *The Status of Women in the States: 2015 Poverty & Opportunity*）

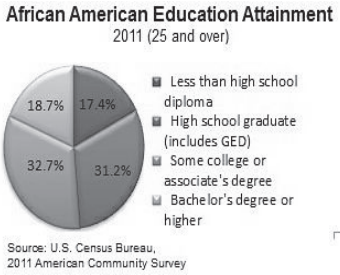


１－３　黒人の学歴について

次の表５は黒人の学歴を示している。1980年の大卒率８％が2011年では19％に上昇し、黒人の高学歴化は進んでいる。特に、男性の46％よりも高い55％が高校卒業後も進学するように、女性の高学歴化は顕著である。また、2009年度の黒人男性の大学進学者数が1,037,000人のとき、同世代（18才から24才）の黒人男性の164，400人が何らかの罪で収監されているというように、黒人男性の学歴差は極端な傾向を示している。このような資料を読み解き、1980年以降の黒人社会は、年収と学歴（特に女性の学歴は顕著に上昇）の面で二極化が急速に進んでいったことを学生は理解していく。

表５　黒人の学歴　（出典：http://blackdemographics.com/education-2/college-university/）





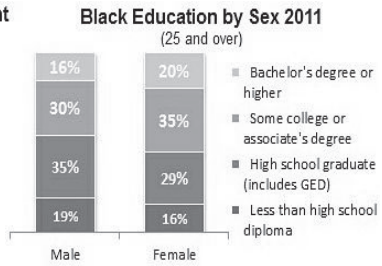
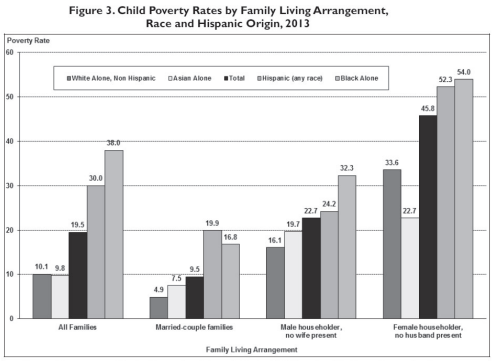


表６から、黒人シングルマザーの貧困化を確認しておく。白人の子どもは約80％が両親の下で育っているが、その内約38％は貧困家庭である。また、白人シングルマザー率は約15％であり、その約54％が貧困層に属する。離婚によってシングルマザーとなった白人の場合、高い確率で子どもたちは貧困家庭に陥る。黒人シングルマザーの場合、未婚でのシングルマザー率が高く、その約80％が貧困家庭である。貧困家庭に育つ黒人シングルマザーの子供は、教育機会は制限され、その分非行率は高くなり、更にシングルマザーの子どもまた未婚シングルマザーとなる可能性が高くなると言われている。

表６　家族形態・人種別の子ども貧困率（出典：Thomas Gabe（2015），*Poverty in the United States: 2013*）



Source: Figure prepared by the Congressional Research Service (CRS) based on U.S. Census Bureau data from the 2014 Current Population Survey Annual Social and Economic Supplement, available at http://www.census.gov/hhes/www/cpstables/032014/pov/pov05_000.htm.

１－４　黒人の現状

過去30年間で、黒人の学歴は特に女性が大きく伸び、高学歴の黒人たちは優良企業に就職し経済的に豊かになっていった。たしかに黒人貧困層は減少してはいるが、依然、約２割は存在する。貧困層が固定化する一方で、黒人の中流・富裕層化が進み、その差が黒人社会の二極化を深刻化させている。このような二極化の中で最も忘れられがちなのが、黒人シングルマザー家庭の苦境である。表６から明らかなように、黒人シングルマザーの子供は、他のシングルマザーと比較して、貧困家庭にある。子どもたちは貧困故に教育機会に恵まれず、よって就職にも不利であることが多い。さらに、シングルマザーの子どもたちも未婚シングルマザーになることが多く、貧困黒人シングルマザーの家庭は負のループに陥っていると言える。資料を読解し黒人状況をイメージすることで、学生たちは黒人の現状についての確かな知識を身につけていく。

現在の黒人の状況を客観的データに基づいて理解しておけば、黒人に対する否定的な記事を読んだとしても、鵜呑みにすることなく客観的かつ公正な判断ができるだろう。例えば2012年にインターネット上で、「アメリカ黒人と犯罪に関する驚くべき10の事実」という黒人に否定的な記事がまことしやかに流された。たしかに数値的には黒人に不利な内容だが、この記事の内容をすべての黒人に当てはまると考える学生はいなかった。この記事が対象とする黒人は貧困層の黒人であって、中流・富裕層の黒人ではないと理解していたからであろう。

１．総人口に対して約30％の黒人が、収監者の60％を占める。
２．司法省によると、黒人男性の三人に一人が死ぬまでに収監される。
３．学校で、黒人学生のほうが白人同級生よりも厳しい罰を受けるので、少年院に収容される率も高い。
４．教育省によると、黒人学生のほうが白人学生よりも遙かに逮捕されることが多い。
５．黒人学生は少年院に収容される率が高いだけでなく、成人の監獄に送られることも多い。
６．過去30年間で女性の収監率は8倍に増加したが、中でも黒人女性の率が飛び抜けて高い。
７．麻薬との闘いは、主に黒人による犯罪が多いコミュニティで行われている
８．有罪判決を受けた黒人の刑期は、白人犯罪者に比べて長い。
９．重犯罪者の選挙を禁じる選挙法に抵触するのは、圧倒的に黒人に多い。
10．ある研究によると、出所後、黒人は給与面で不当な差別を受ける。

２．アメリカ黒人を映し出すアメリカ映画

授業では、政権を担当する政党とその時代に制作された映画のリストを使って、政権担当政党の価値観あるいは黒人観が映画に登場する黒人像（ステレオタイプ）に影響を与えてきたことを概略的に示している。映画に登場する黒人ステレオタイプとは、白人に従順に尽くす「おとなしい黒人」のアンクル・トム、お馬鹿でのろまな怠け者のクーン、いつでも白人を包み込んで癒やしてくれるマミー、白人を性的に誘惑するムラトー、最後は、白人に反抗的で最後に殺されるバックという５つのタイプがある。実際は、この５つのタイプの混合型や変形型が登場するのが、便宜上この５つのタイプを利用しておく。以下、政権担当政党の価値観が表れた施策とその時代に公開された映画に登場する黒人イメージを概略的に示しておく。

２－１　政権交代と黒人ステレオタイプ

1933から1953年までの民主党政権期は、戦時に黒人労働力を軍需産業で活用するため「人種、信条、肌の色、出身国」の違いによる差別を禁止した。1949年には、公正雇用実施法を制定し、人権への配慮を見せた。この時期に、黒人エリート研修医に弟を殺されたと勘違いするチンピラが仲間を使って黒人医師及び黒人たちに暴力を振るう『復讐鬼（*No Way Out*）』（1950）が上演される。この映画でシドニー・ポワチエが演じる黒人エリート医師は、白人からの差別を忍耐強く我慢し反抗することのない「おとなしい黒人」のステレオタイプである。

1954年から1960年までの共和党政権時代は、公立学校での人種による隔離を違憲とする判決が行われ、また黒人が忍耐強く団結して実施したバスボイコット事件、それに刺激されたグリーンズボロのシットイン運動など､黒人自身が立ち上がった時期であった。このように黒人の意識か向上した時期に上演された『手錠のままの脱獄（*The Defiant Ones*）』は、横転した護送車から脱獄した元ホテル・ボーイの白人と殺人罪で

服役する黒人が対立しながら逃亡するという設定となっている。だが、この暴力的な黒人を演じるのがシドニー・ポワチエということもあり、全体的に「おとなしい黒人」という印象は否めない。虚構の中の黒人は、たとえ暴力的であっても、白人に従順な黒人でなければならなかったのだろう。別の見方をすれば、現実社会では黒人による人権活動が顕著になり白人と対立したとしても、60年代のアメリカ白人の意識の中では、黒人は白人に刃向かってはならないということが前提であったのだ。

1961から1968年の民主党政権は、ケネディ大統領の華々しい登場に始まりヴェトナム戦争が泥沼化していく期間にあたる。また、キング牧師が主導したワシントン大行進やセルマの血の日曜日、そしてキング牧師の暗殺、さらにマルコムXの活動とその暗殺、ロサンゼルスのワッツ暴動、あるいはアファーマティブ・アクションの開始など、様々な出来事が立て続けに起こり、白人と黒人の両者の人権意識が高まっていった。人権意識の高まりに呼応するかのように、『アラバマ物語（*To Kill a Mockingbird*）』（1962）には、白人女性を襲った罪で訴えられた黒人を人道的立場から弁護する白人リベラル派弁護士が登場する。だが、白人陪審員による判決で黒人は有罪となる。積極的に黒人の公民権支持を唱っていたケネディ民主党だが、この映画の黒人は、依然として白人に抵抗することなく白人弁護士に依存する「おとなしい黒人」の典型として登場させられている。ケネディ政権時代であっても、白人意識の中で、黒人は白人よりも劣り白人に頼る存在でなければならなかった。それは、被告の黒人が白人女性を「かわいそうに思った（I feel sorry for her）」と発言したときに、裁判所内の白人たちの只ならぬ雰囲気に如実に現れていた。

同政権時代の『夜の大捜査線（*In the Heat of the Night*）』（1967）でも、南部に里帰りして殺人事件に巻き込まれる黒人FBI捜査官をシドニー・ポワチエが演じており、「おとなしい黒人」イメージに大きな変化はない。南部白人から差別的眼差しで疎んじられる中、シドニー・ポワチエはエリートFBI仕込みの捜査を行い、白人至上主義集団KKKの反感を買い襲撃を受ける。事件捜査を通じて黒人捜査官の能力を認め、次第に打ち解け合う白人保安官だが、やはり黒人からの共感はきっぱりと撥ねつける。黒人エリートを主人公に設定したという意味では画期的な映画だが、白人社会の価値観を身に着けたエリートとは言え、黒人は白人から共感し合うことを拒否される。ここでも、身の程をわきまえるべき「おとなしい黒人」ステレオタイプから逸脱することは許されていないのである。

1969から1976年の共和党政権時になると、生活レベルが向上し余裕が生まれてきた黒人層は、このような「おとなしい黒人」に飽き足りなくなる。テレビドラマの『ルーツ（*Roots*）』が放映され、黒人がアフリカから捕らえられ運ばれてきたこと、奴隷という厳しい環境で労働を強いられてきたことなど、黒人たちの苦悩の歴史を白人たちも理解しはじめ、黒人たちは自らの出自を再発見し誇りを持ちはじめる。このような時代の雰囲気の中、悪徳白人マフィアや警官を黒人が懲らしめるという設定のBlaxploitationの映画が短期間で大量に制作された。Blaxploitationは、黒人Blackと「搾取」という意味のexploitationを組み合わせた造語で、黒人を主人公として黒人受けを狙った映画を指し、これまで映画を見なかった黒人層の足を映画館に向かわせ、チケット代金という形で黒人から金を巻き上げる映画を揶揄した言葉である。このBlaxploitation映画はすぐにマンネリ化し飽きられてしまうのだが、映画の中だとは言え、黒人ヒーローが悪徳白人を懲らしめるという設定が可能になったことは注目してよいだろう。ちなみに、悪徳白人を懲らしめる黒人像は、白人に反抗的だが死なないという意味で、変形的バックと言える。

1977から1980年は、アメリカ社会全体がヴェトナム後遺症とも言える時期に入り、最も民主党らしくないと言われるカーター民主党が政権を握り、マイノリティを優遇するはずのアファーマティブ・アクションが「法の下の平等」を侵害するとして違憲判決が下される時代である。社会全体に停滞感や閉塞感が漂い、映画もその閉塞感に飲み込まれたのか、人権を求める活動を時代遅れとして描き始める。1976年上映の『カー・ウォッシュ（*Car Wash*）』は、洗車場で働く様々な趣向をもつ様々な人種の人々の平凡な日常を描いているのだが、その中一人現状に不満を抱く黒人青年が登場する。ロッカーに反抗を象徴するマルコムXの写真が張ってあるこの黒人青年は、呑気にその日その日を暮らしていく他の従業員とは距離を置く。青年は常習的に遅刻を繰り返し、堪りかねたオーナーは解雇を言い渡す。その夜、洗車場の売り上げを盗もうと押し入ったところを、同じ職場の黒人に説得され泣き崩れるところで映画は終わる。この場面は、暴力的に不平不満を解消しようとしても何も変わらないという暴力的解決の無効性を突きつけるという意味で、現実社会の閉塞性を象徴していると解釈できる。ヴェトナム後遺症に蝕まれるアメリカ社会の閉塞感を前にして、白人に抵抗するバック型黒人という旧来の対立構造が、もはや有効性を持ちえなくなっていることを示唆しているのだろう。このような時代の閉塞感を打ち破るべく華々しく登場したのが、共和党のレーガン大統領

である。

1981から1992年までのレーガン・ブッシュ政権時には、アメリカ経済を立て直すために自由主義政策、つまり大企業優遇と福祉の切り詰めを行った。この政策に伴いフード・スタンプの配布が制限され、貧困層、中でも貧困黒人層が大きな痛手を被り、また「麻薬との戦い」によって20代黒人男性の10人に一人が収監された。その一方で、黒人指導者ジェシー・ジャクソンは「虹の連合」を組織し、1984年の民主党大統領候補指名の予備選に出馬しうるほど黒人の社会的力は強まっていた。黒人の勢力は、共和党が保守派黒人のクラレンス・トーマスを最高裁判所判事に任命し黒人からの批判を交わさねばならないほど無視できなくなっていた。そのような中、1991年に発生したロドニー・キング事件は、白人警官が執拗に黒人容疑者に暴行を行うという黒人差別の構図が相変わらず続いていることを再認識させた。黒人映画監督スパイク・リーがこの映像を1992年上演の『マルコムX（*Malcolm X*）』の冒頭に利用し、旧態依然たる黒人差別を告発したことは周知の事実であろう。さらに付け加えれば、この事件が全米に知れ渡ることになったきっかけは、近隣住民がたまたま暴行現場をビデオに録画したことだったように、一般市民が報道に携わることを可能にした最初の事例であった。いずれにせよ、レーガン・ブッシュ共和党時代に黒人中流・富裕層が登場し、黒人社会の中で格差が広がっていくとともに、黒人中流・富裕層は無視できない勢力として認知されていく。

1980年代は、1984年上演の『ビバリーヒルズ・コップ（*Beverly Hills Cop*）』で主演したエディ・マーフィーの存在は無視できないのだが、アメリカ映画を使ってアメリカ社会を分析する奥村（2007）、佐藤（2008）、越智（2015）、そして赤尾（2015）らの研究は、なぜかエディ・マーフィーを取り上げない。エディ・マーフィーが演じる黒人警官が白人警官の捜査を援助するコミカルなアンクル・トム型であることもあって真剣に検討すべき対象ではないと考えたのかもしれない。だが、エディ・マーフィーの登場により黒人が国民的アイコンとして認知されうること、また黒人も高額出演料を勝ち取れることが証明されたのであり、その点は評価すべきであろう。ところで1980年代の黒人ステレオタイプを考察する上で重要な映画が、1989年に上映される。スパイク・リーの『ドゥ・ザ・ライト・シング（*Do the Right Thing*）』と『ドライビングMISSデイジー（*Driving Miss Daisy*）』である。

『ドゥ・ザ・ライト・シング』はニューヨーク市の暑い夏の一日を描いた作品である。白人からの差別を耐え抜いてきた古い世代と差別がある程度是正された時代に生きる若者世代との意識の格差、黒人町にイタリア人がピザ店を開業し、黒人客から金を吸い上げるという経済システムへの不満とその経済システムを刷新する力のない黒人の行き詰まり感、後からアメリカにやってきて成功する韓国人をやっかむ鬱屈した感情、これら怒りをどこに向けてよいのかわからない閉塞感が、白人警官が黒人暴徒を取り押さえようとして殺してしまうことをきっかっけに一挙に爆発する。イタリア人ピザ店が放火され、黒人の不満は一時解消する。だがこの映画は、放火されたイタリア人と放火した黒人が一緒に後片付けする翌朝の場面で終わっている。この放火の場面は、映画の常套手段として見れば、アポカリプス的な破壊と再生を意味するはずだが、放火した側とされた側が黙々と地味に後片付けをする構図は、リアリズムに徹するスパイク・リーの冷静なアメリカ社会分析を反映している。安易な暴力も安易な和解もない、つまりお互いの価値観が折り合えない状況の中では、忍耐と譲歩と協調が双方に求められるということを伝えようとしているのだろう。

このような黒人映画監督の冷静な現実分析と比べたとき、同じ年に上演された『ドライビングMISSデイジー』は、やや現状分析を欠いた安易なアンクル・トム型黒人を描いていると言わざるを得ない。南部の綿糸業で成功した息子は、認知症が始まった母親デイジーに黒人ドライバーをつける。長年教師として自立していたという自負を持つデイジーはこの黒人ドライバーを認めず度々意地悪をするのだが、徐々にデイジーは黒人ドライバーと心を通わせるようになる。認知症が進行して施設に入ったデイジーが、黒人ドライバーからクリスマスのパイを食べさせてもらう最後の場面は、黒人と白人女性との心の通い合いを描いていると評価されているのだが、1980年代アメリカの閉塞的状況を考えるかぎり、安易な和解だという印象は否めない。また、無学の黒人ドライバーの娘が大学の生物学教師になったということがそれとなく描き込まれているが、これは黒人中産階級の勢いを無視できないために紛れ込ませた感が強い。皮肉な言い方だが、ロドニー・キング事件とその後のロサンゼルス暴動に明らかなように、黒人社会の鬱屈した不満はいつ爆発するやもしれない中で、せめて映画の中だけでも「おとなしい黒人」であってほしいという白人の思いが反映していると言ってよいだろう。

1993から2000年のクリントン民主党政権は、国民皆保険制度の導入を目指したが挫折し、中間選挙では大敗を喫して、共和党寄りの政策に転換せざるを得なかった。皮肉なことに、この政策転換でクリントン政権

は財政赤字を脱することになった。同じ時期に、キング牧師のワシントン大行進を真似てルイス・ファラカンが100万人集会を開催するが、もはや差別への抗議ではなく、黒人男性の誇りと結束を回復することを目的としてささやかな集会であった。

現実社会の複雑化を反映するかのように、映画も黒人ステレオタイプに当てはまらない黒人が登場するようになる。1997年公開の『ソウル・フード（*Soul Food*）』は、家族間格差と黒人男性の自信喪失を家族の絆の回復によって癒やしていくという、あたかも白人中産階級の苦悩をコピーしたかのような設定だ。裏返せば、黒人中産階級が自分たちの生活も白人中産階級並みになったという自信を反映しているとも言える。2000年上映の『バンブーズルド（*Bamboozled*）』（日本未公開）は、このような黒人中産階級の自信を抜きにして読み解くことはできない。ハーバード大学出身のテレビ局プロデューサーが社長から視聴率を稼ぐ番組を制作するよう指示される。そこで思いついたのが、19世紀から20世紀初頭までアメリカで流行したミンストレルショーを復活させるというアイデアであった。ミンストレルショーとは、白人が馬鹿で間抜けな黒人に扮して笑いを取る大衆劇で、黒人からすると屈辱的な過去を思い返させるものである。それをさらに、白人扮する黒人を黒人自らが演じるという倒錯的演出を工夫し、視聴率を上げようと企む。最初、黒人からの協力を取り付けるも、内容が屈辱的になるにつれて黒人の反感を買い、ついにエリート黒人プロデューサーは部下の黒人女性に襲撃される。このエリート黒人は、今日の社会的に上昇した黒人であれば、自分たちの負の過去を利用しうるだけの心理的余裕を保てる、それだけ黒人が自信を深めていると考えた。だが、現実はエリートが思うほど黒人社会は全体としてはその自信を高めていなかった。あるいは、エリートとそれ以外では、意識の違いが大きすぎた。この映画の背後には、白人対黒人の対立構図だけでなく、富裕層黒人対貧困層黒人という黒人間の格差問題も、黒人社会は抱え込むに至ったという冷静な現状認識がある。

このような状況は、2001年から8年間政権を握ったブッシュ共和党でも、その後政権についたオバマ民主党政権でも基本的に変わりはない。9/11の同時多発テロは、21世紀アメリカがもはや世界の秩序を守る覇権国家ではなく、他者からの攻撃を受けうる普通の国家になったことを内外に印象づけた。2005年公開の『クラッシュ（*Crash*）』は、人種間の優劣なく、すべてのアメリカ人が何らかの不満や行き詰まりを感じ、小さなきっかけを見つけてはそのストレスを小さく解消せざるを得ない窮屈な人間関係を生きていることを印象づけた映画である。そのストレス解消の対象として黒人が依然として狙われているのではないかという疑念が現実化したのが、2013年の『フルートベイル駅で（*Fruitvale Station*）』だった。また、2016年公開の黒人男性の同性愛を描く『ムーンライト（*Moonlight*）』は、差別と経済格差に加え、黒人社会の性の問題をも対象にし、ある意味で、黒人社会の現実を成熟した広い視点から切り取っている。

このように授業では、政権交替が示すアメリカ社会の価値観の変化とそれに応じた黒人の自己意識の変化を解説しつつ、その時代を象徴する映画の一部を見ることで、言葉によるアメリカ黒人理解をより鮮明にイメージできるように工夫した。ここに解説したのは授業内容の一部でしかないが、次に、学生の黒人理解がどのように変わっていったか、あるいは深まっていったのかを紹介しておきたい。

２－２　学生の理解と評価

「本講義での学びが、人種問題に対する深い学びとなった」と授業評価したある学生は、アメリカ映画からアメリカ文化を学ぶときの注意点、映画の中のアメリカ黒人像の制約を、次の三点に要約する。「一つは、映画はアメリカ文化を構成する重要な要素であり、かつ娯楽産業であるということから、主な観客である白人中産階級の要望を反映しがちであること。二つめは、アメリカ白人にとって好ましい黒人像を演出する可能性が高いこと。三つめは、現実政治、特に政権を握った政党は、その時代の主流価値観を掬い取るため、政権政党の価値観を反映しやすいこと」。この学生は、授業で取り扱った『ハイヤー・ラーニング（*Higher Learning*）』（日本未公開）の黒人大学教授フィリップに注目する。同教授は、黒人であるからと言ってメリックを擁護することもなく、社会の現実を厳しく説くという人物である。フィリップ教授は、白人に対して自ら壁をつくるのではなく、「困難を乗り越えながら、白人と共同して生きていく姿」を伝えようとする。大学構内で無差別発砲事件が起きた後、同教授がメリックに、“In spite of the recent tragedy here, you have persevered, and you have overcome a great many obstacles this semester. For these reasons, you have my utmost respect and every confidence that you will make a wise decision concerning your future. Without struggles, there is no progress.”と語る。「争いのない世の中など理想としてはあっても現実は厳しいものがある。今日の様々な問題のなかで、人は多くの障壁を

乗り越えていくことにより成長かありそれだけ社会の進歩がある。本作品でのフィリップの姿は、黒人の未来を映し出している姿とも言えるものがあり、移り行く世の中で人種差別問題の今後を表現しているのではないだろうか」と、授業内容を踏まえた上で、自分で考えた意見をレポートにまとめている。

また、別の学生は、『ドゥ・ザ・ライト・シング』の最後の場面でクローズアップされる知的障害者の男に注目する。「彼はいつもキング牧師とマルコムXの写真を持ち歩いている。キング牧師は、非暴力的で融和的な指導者であったが、マルコムXは、同じアメリカの黒人公民権運動活動家であるが、自衛のための暴力は認めるという考えをもっている。彼は「私は暴力を擁護する者ではないが、自己防衛のための暴力を否定するものでもない。自己防衛のための暴力は「暴力」ではなく、「知性」と呼ぶべきである」という言葉を残している。・・・マルコムＸは一時期融和的なキング牧師を公然と「弱腰」と批判していた（が）・・・キング牧師とマルコムＸの２人は、人種差別や黒人の権利などの問題と闘ったいわゆる黒人たちのヒーローである。そんな２人の写真を（知的障害者の男が）常に持ち歩いているということは、人種差別の不当性や黒人の権利の保障を常に人々に訴えているというふうに感じる」。この学生は、授業ではあまり触れられなかった知的障害者の男に注目し、マルコムＸの言葉を引用しながら、その男が持っているキング牧師とマルコムXの写真の象徴性を解釈して見せる。

また別の学生は『バンブーズルド』を取り上げ、この映画を作成した監督の意図を探っている。この作品に登場する自称進歩派の白人に関して、「「自分は黒人に理解がある」と主張しているがその実、その人たちもニガーという言葉に含まれる侮蔑的な意味への認識不足や思い遣りのない言葉を吐く上司であったり、黒人が黒人を馬鹿にする作品を作ってもそれは差別ではないでしょう、もっと黒人を雇いなさい、と進言する弁護士であったりなど、その言動に差別に対する理解は決してあるとは思えない人々ばかりである。監督はそういった人々にあえて「私は差別される黒人というものに理解がある」と言わせることで改めて白人に差別というものを本当に理解できているか、と問いかけているのではないでだろうか」。

さらに、「黒人もまた黒人に扮し、彼らを馬鹿にし、笑う」ことを企画したハーバード出身のエリート黒人プロデューサーについて、「白人の世界で成功した黒人が時に「白人になったつもりか」というような誹りを受けることがある。本人の努力や意図とは関係なく、白人に迎合した黒人と言われるのである。しかしなかでもこの作品ではマンタンを見る観客が白人も黒人もそろって顔を黒塗りにして一緒になって劇中の黒人を馬鹿にして楽しんでいる、という点が興味深い。差別をしていた白人とされていた黒人が一緒になって差別をしているのである。この一場面はいかに差別というものが起きやすく、そして忘れやすいものであるのかを象徴しているように感じた。自（身）が受けていた差別ですら対象が自身で無くなったとたんに加害者として参加してしまう。そんな姿をあえて映像にすることでいかに差別が空虚で根拠なく、そして気づかぬうちに加担してしまう類のものであることを我々に問いかけているのではないだろうか」。

最後に、『ヘルプ（*The Help*）』や『大統領の執事の涙（*The Butler*）』について、「どちらの映画も「過去に事実こういった差別の歴史があり、それでもその差別をそれぞれの方法で戦った人々がいた」というような作品だと感じた。監督の方針や作風もあり、たった２作品と比較していえることではないのかもしれないが、黒人差別を昔のものとして忘れ去ろうとする風潮がある（なか）、事実こういった差別があったということを訴えかける作品が増えてきたのではないか、と感じた。白人の中に存在する差別そのものから目を背けようとする姿勢に対し、まず過去何があったのかを正しく認識してもらうことが大切だと考えられているからかもしれない」。

以上、「英語文学講義」を受講した学生のレポートからその一部を引用する形で、学生のアメリカ黒人理解が深まっていることを示した。授業に刺激を受け、独自にアメリカ商務省（US Census Bureau）の資料を読んで、社会情勢と映画のなかの黒人像を比較し、映画の場面や監督の位置を解釈する姿勢が見られたのは、大きな成果であった。ちなみに、学生が取り上げた『ハイヤー・ラーニング』、『ドゥ・ザ・ライト・シング』、『バンブーズルド』は、すべて黒人映画監督による作品である。おそらく白人映画監督の作品よりも、黒人の現実をより反映していると感じ取ったのかもしれない。

おわりに

今回は、授業の中でアメリカ黒人のイメージをアンケートし、その偏りを確認した上で、様々な資料を使い、学生に異文化を理解し公正に判断する大切さを伝えてきたことを一部紹介した。将来英語教師になる学

生は、異文化の知識を活用する方法と異文化について公正な判断をすることの重要性を理解して置かねばならない。何となく知っているレベルに満足するのでなく、インターネットで手に入る資料を使って、自ら新しい知識を学んでいく、そして新しい知識を身につけることが視野を広げ、物事を公正に判断できるようになることを、将来の教師が実践実感していくことが望ましい。その異文化理解の方法を、映画に登場するアメリカ黒人像を分析することで示し得たと思う。受講学生は、アメリカ黒人に対して日本人が持つイメージと現実のアメリカ黒人の多様性、文化産業としての映画の制約、アメリカ黒人映画監督の地力をよく理解したと言えるだろう。今回は、一つ一つの映画作品の分析は掲載できなかった。次回機会があれば、授業で解説しきれなかった作品分析と学生の分析とを論じてみたい。

参考文献

赤尾千波（2015）：『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ：「国民の創生」から「アバター」まで』，富山大学出版会.

明石紀雄監修 赤尾千波・大類久恵・小塩和人・落合明子・川島浩平・高野泰編（2002）：『21世紀アメリカ社会を知るための67章』，明石書店.

Benshoff, Harry M. and Sean Griffin (2009)：*America on Film: Representing Race, class, Gender, and Sexuality at the Movies*, Wiley-Blackwell.

Beresford, Bruce (Director) (1989)：『ドライビングMISSデイジー』（*Driving Miss Daisy*），Warner Bros.

Black Demographics "College and University: prison or college?"
(http://blackdemographics.com/education-2/college-university/ accessed on 5 December, 2018)

Center for American Progress (2013) "The Top 10 Most Startling Facts About People of Color and Criminal Justice in the United States."
(https://www.americanprogress.org/issues/race/news/2012/03/13/11351/the-top-10-most-startling-facts-about-people-of-color-and-criminal-justice-in-the-united-states/ accessed on 5 December, 2018)

藤原帰一（2006）：『映画のなかのアメリカ』，朝日新聞社.

Gabe, Thomas (2015)：*Poverty in the United States: 2013*, Congressional Research Service.

Haggis, Paul (Director) (2005)：『クラッシュ』（*Crash*），Lionsgate Films.

The Institute for Women's Policy Research (2015)：*The Status of Women in the States: 2015 Poverty & Opportunity*.

Jewison, Norman (Director) (1967)：『夜の大捜査線』（*In the Heat of the Night*），United Artists.

Kramer, Stanley (Director) (1958)：『手錠のままの脱獄』（*The Defiant Ones*），United Artists.

Lee, Spike (Director) (1989)：『ドゥ・ザ・ライト・シング』（*Do the Right Thing*），Universal Pictures.

--- (2000) *Bamboozled* New Line Cinema.

Mankiewicz, Joseph L. (Director) (1950)：『復讐鬼』（*No Way Out*），20th Century Fox.

松岡泰（2006）：『アメリカ政治とマイノリティ―公民権運動以降の黒人問題の受容―』，ミネルヴァ書房.

Motion Picture Association of America (2016)：*Theatrical Market Statistics*.

Mulligan, Robert (Director) (1962)：『アラバマ物語』（*To Kill a Mockingbird*），Universal Pictures.

奥村みさ・スーザン・K・バートン・板倉厳一郎（2007）：『映画でわかるアメリカ文化入門』，松柏社.

越智道雄監修 小澤奈美恵・塩谷幸子編著（2015）：『映画で読み解く現代アメリカ：オバマの時代』，明石書店.

佐藤唯行（2008）：『映画で学ぶエスニック・アメリカ』，NTT出版.

Schultz, Michael (Director) (1976)：『カー・ウォッシュ』（*Car Wash*），Universal Pictures.

United States Census Bureau (2011)：*The Black Population:2010*.